雅氏初源東歳

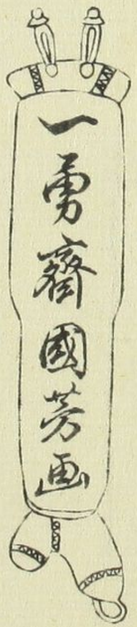
二編

笠亭仙果作

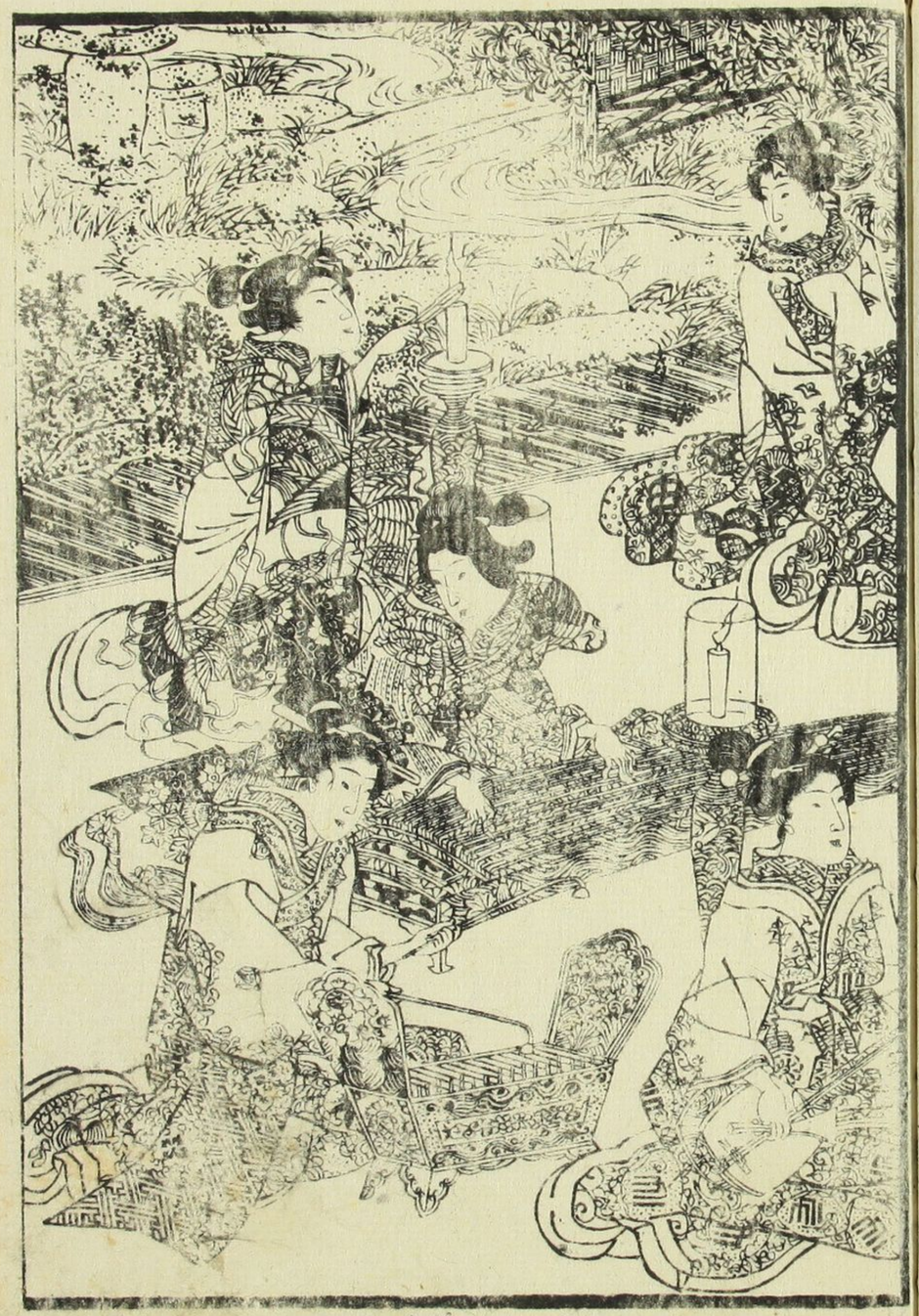
一勇齋國芳画

稚源氏東國初旅 二編

一勇齋國芳画



明治文庫



浄瑠璃姫月夜の合弾の体

右の續

一すんまくよりつゞき

白拍子

私男雛

旅の義

新歌を美利市て

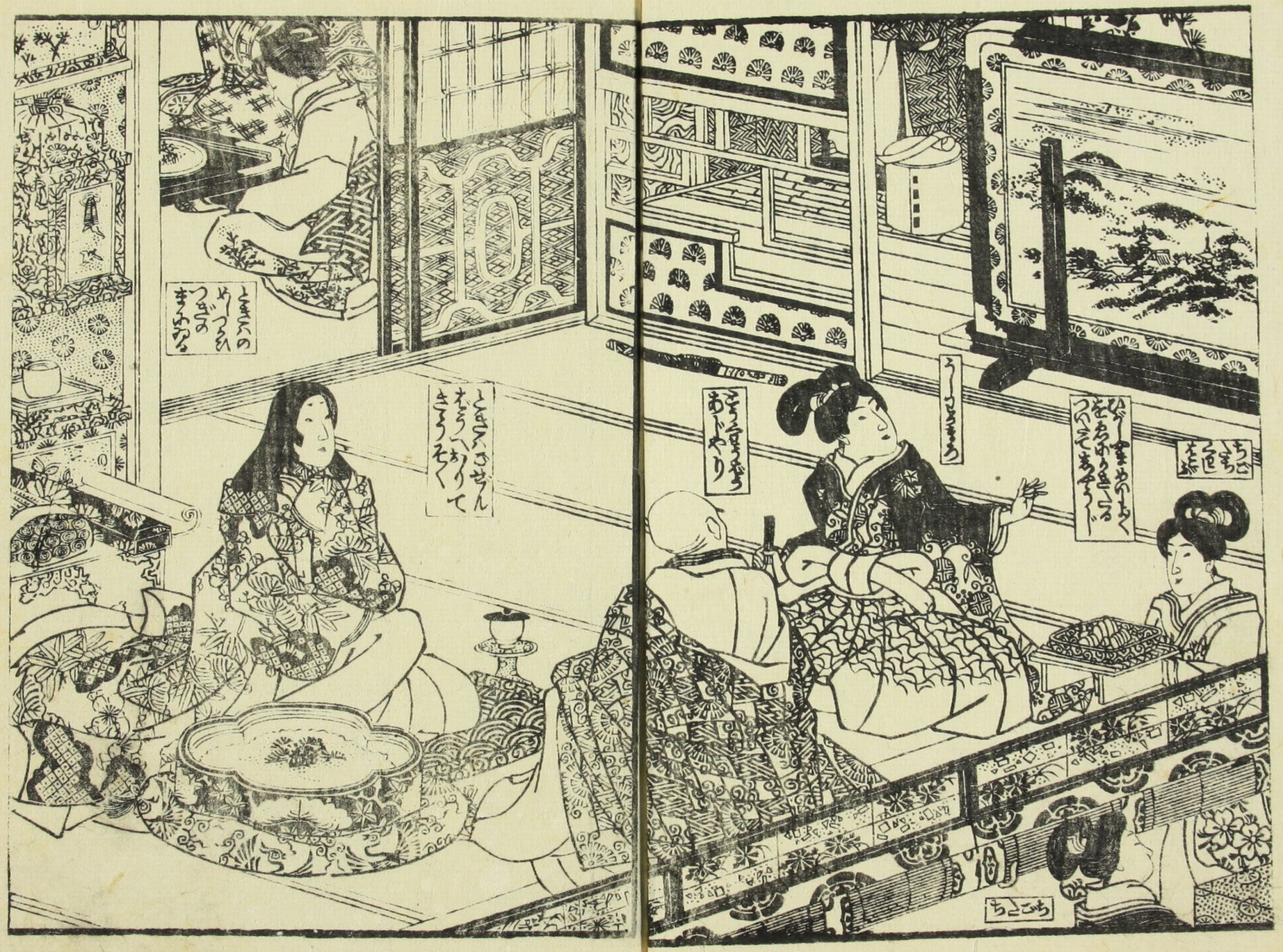
小男八中の義

笠亭仙果記

○初へん二十丁
まんえん金巻の
まつゞきそのうれぬべよりそのまゝよりつゞく

さる程に光照御前ハ阿闍梨のことばに随従て僧堂を立出来光坊に移ら
られけるが方丈より持佛堂へ通ふ廊下をめぐりしてかの小座を居ぞせる
一間所にかざりあひ入る阿闍梨ハ方丈にて燈をつけ明障子をたてもひらせど明星
ば山風吹入り一日暮ぬるゆゑればうちさむし廊下をあゆみく児子見芳のあかりにちらちらこの所で
もうろうとせずある窓に障子を外ハ御の板縁におかせ初秋まで八こゝの所で
休息やすらんといへれば光照ハ阿闍梨の厚意を謝し件の障子の絵をうち
あがめ巨勢金岡千枝光則住かきまりへもこそ画の筆意墨画の妙
虎名人の筆跡も女童の眼にハ分解ぜらく[illegible]精神を移してうちさる大和
絵の山水こそうつらしけれ衣被て臥ち枕にかりとも人の肝ふ添しも虎程やハ
ちひでもごくハさえぬ山々ハ紅にそき東山鷲栖楼門丹塗の神祠ハ祇園その要に
書く又ゆらが神楽祭の燈を見れバ阿闍梨もとあく「険嶮く画て縁ねを添く彩
なるゝ六ハ比叡山四明嶽「清き水は月の目にさそ見合中やいふんさりとて見る宮ぞちうへ
赤山のあとあら自ら と光輝の笑顔に年若も「八坂の塔に園に七にもの数人集り
なる小町踊る鳥歌を唄ふ寺の中山の下小書羽の滝の糸「乱れ一筋」のにして昔を今ふ文い
われ出ずるぞやあの清水の観世音年にうちをうけ持る大慈大悲の御利益ハ何か云ふ
と日なべかれこれ年数をもくちの福田いふ持くとも寔業を亦おれ持を勢ひ「ぞせさし

あさる危難を救ひさせ一年への格子に通夜申上まつらし祈り験ありや衆生足織
に登りするなかひの弥上指する是れバ早十八年昔の狼苦を今とて仏わらく清るをさき
よりし夜凌尾張へ渡りへ人の八果なうひしとし遍まりより行も消くの表の待宵いや寒く
あやとのらぬ泥路へ入條の下りのあまたで迄ぎ踏みしうへそさきよりの清水の坐も白つと独
切ふの一筆くに近くにある時ハ花皿に香も我思を絵當武士の縄搦らと怕しと
庵ぞる独の東坊暁に来生て合せそ組む十指蓮華王院新熊野三の橋や三人の児に
ひらかれてらく拾ひ命を前ふく三十三間堂縄ひくや木幡の辻祠の向の際も月経御ハうけもや
山深く路を指て迷入ひ行たまへ根ならく宮なちから当りハ人ハなう見らと嗚々小谷の山
老ぞさつき行なぞ谷ハおひて行へもぞあと同声に朱の木魂の唯くと行ふ夢より谷と迷ふ
男ハ木幡の山に日に暮ぬ風に衣薄き袖ほども御八こそ大体ハ木の木陰に立ち寄れ
株の水の厚冰つらく足をもらすぞ洛するこうち八あかりしやそれちりとうらうらう二歳子の行
のあとはもあるまきの谷間にこの世をこそあぶ若丸郎総氏の観世供養の[illegible]
とふ恵く衣見ハ我をかにするやたとつき行ぞ迷ひ旅人助ゆとおとろへ毒と書く[illegible]
天怪ら雪女かと光婦へ八怕かりて門をも開けぞ硯破に登せし今男が見八兄とぞ
つめてを悲しめ淚袴に浸れ心地や一株燕も凍つく正宝に秘をさもいふぞとして
乙老の戦慄てあくをかふりくとうさむさまのいちにさんえる日日ありきえ秋らずん


ちゃのこと
ひゞーまめのしろく
をちゆるをこる
つゝてまそそーゞ
そうーつとまろ
そうぜうぞう
あゞやり
ちゃのこと
ときこのさぜん
ぞうへはりて
きそうそく
ときこのやつこれ
つゞのまそゝゝ

まもなく気を微しきうとも癡に絶入て人ごゝちなき紀秋乳房へおもうがつよく噛つきし痛さ
に息を吹返し呻吟ながらに臥たるの宝号を称へて完然をたてまつるを千代と人違ちのうち其縁
児の命を今日にて断られ冰刃命も名のミ温に助ハ凡俗に姿を復し帳子音に今八ましこそでなる
も実に浮世のきぬ途を離れ宗業後世助を手にて往流声を聞つけてさへ変化ゆて八今
りしをたおらき痛まはしやと呼入りし手術の叡あらず半死なるつまでくをたをかもせん皆枝
もあそんはそゝ命をとるがあらん唱名仏の加護ぞやとらひつ嬢子の表の過をとこかく
させてえらる天群立松の枝重くあまに留守る帝承父筆法の体を狼坑に孔しこうち
よげ由ぞ直がしる「あら味しや月光にひとしく人とこゝ美なる一妻ハ識國なる妻兄
る日も厭ハしやこれはとわりの大雪をかくほど大和國宇陀郡龍門に隠さし姪も六波羅へ
呑れし時も解るぞ我子三人が身の上に叫奪なる然を萬門和月毎の十八日三十三巻と
まねるせま法華経を月に三巻をとる古傷あさりし利生新にいこゝ達に観らもあく生長
のゝちゝの後へ再縁せし後までも相國家の所へつかせしとき時わが為に業子すでての源
して帰るも悟る佛の道ぞもしらく俗体を厭棄に法師とありて九牛の一毛も報恩謝徳なる
こそいとよく自他の利益婦きん悪魔のゑまゝしらわきさまほじや迷に迷ひを歎し佛に懺
悔下でし落涙しつゝあきされて日ごろのものもわゝびゆ〳〵牛若ハ己が浣穢すゆう「一生涯
き沙那王と宗たるの是同佛名の大音八寂知の宝も何放を従へをのがまちてのぞこ妻坊機

るく中されよと阿闍梨の途に牛若丸「何の子細も候はねど一時様が備ちひ剃髪せざれば
仏名の修せられ給ふるなれば先第一に釈迦文世尊西方浄土の阿弥陀佛擇髪を昭晄に頂戴き
九重嬬子の諸井達寄ちの医に若る間天法是有髪の菩薩として又百三澤と比並の
外佛に宗の丸きにまくじたび寂とても末世の兄夫ゆて持れて比丘戒なるまゝなるの出
家して頂の髪を剃りと年鼠に化し三丹の杓家紀僧正の相書光の田舎りかて六猫
猿にも劣るべし悔ればわ身帥ととる毒にも書りぞわ作ゼバ慈き歎剃髪すゝめも及ハしとこそ
存するあれ書ぐらく延うしてあれこの上年ふ生をうちあまる口験くもの末ふる末子の血の限りと
やん三人の中ゆもひと刻さの千人も生まさしハおととあれどいいまどの刃り閑ゆかし去年の七月の頃
まで八鞍に武芸を学びよあらげなやと八息ひながら手がゆわ不く思ひれ才のぶ我八てちまち
身ゆ及ぶんと意見せしをバ用ゐて主がとも止ず毛それハ山門寺門の荒法師長刀つらふ例も
ありし経にはあらうなる酒に酡れ色に溺れとしくふも生ゆそ阿弥陀仏に戴き加之この燈りと
の奥と数人も狼子なる如衛の番兆世のとりさくそをきくて百千の諸をすて耳を掩く皆
悩ぞや天魔の波旬の所為なるら歎ある児の娘吠る屢亥すて叱りても益募る不行跡
阿闍梨さゝぬゆも言辞しての事もぞうし新しらそ新何とありて亡をとりても侍さぞひ何と
思ぞ牛若丸我非を掩ふ猿智恵寂に大盤の仏しち方八ゆきてあられぬ延云勿体なの罪
汝や見へ遂ゆも卑しとき返るみあへさがむまじ〵くほらへてなお隠る機を吾るが孝行ぞ十八や十六で毎

狂呆果しと常盤ハなち息牛若ハ次男ハ一男ハ十人女ハ十三婚礼をむすばせよし八令條の
内室めとれる光源氏も十二にて本妻葵の上よし紫式部も出て仕彼歌よむも前世ゆゑ嫁
女に随ふ一角仙人佛弟子の阿難さへ嬋娟に迷ふ是ハもと色欲の情を離れても猶て此の人
色是空の眼で見く厭離も穢土なりけり十六歳過婚姻に快楽して主のまゝ産をも
おりしそ天魔波旬の障礙なりとこそ共にのむけしきにみえざりけり
○一週をそくじめて女子時ハ千代も結ばれ一姫小松法躬の御池の亀鶴に群居ておそよ
あれど六歳許なる幼児に合掌して貞ハそれも被見と称して迷ひもきこ三十のわたくし夫
もなく此鞍馬寺の大門に近頃小家をまつりてせんと抱かましつらむ志と日頃の
昼八ツ灯燈にかけ気遣ふ人々に茶みてどうして世を渡るより木芽漬売嫩仏が家より
八町あまり三町ばかりの近隣まで其の流れも此寡婦とぞある心二の中とある今ほてく
血をわけし兄弟のおもひをなし嫩代丈婦に懸るも孫子の人まづおわけなり牛若丸と
呼び養女もとこの座敷と定めしありけりされば夜深く更けかき激されし鎌桶を
つぎ置くとりつくろふ経を日も寝く業にはげり嫩仙も家より深の郷を注ぐの睨合のとせ
らしきまぎれに家を出る僧かげの人経幸りた婦が侍ふへ入りとより「貞節」伏しても休
もなく静見ゆるをとゞめしき精出して今松の稽古に眼の影もせぬ此度の長の経ておいさ
絶に役寄でもわれまれバよろづこのものをつかはせて「まづ此度長ハ藪のまらぬ覚えず後か

あっぱーのそこ
きぬこしの
うつくしきを
ちるところ
ちゃやうろむろ
ちのくるのてん
きぬこしの
ぬすめちゃうこ
うちのかうもの
うくるかたまつ
名岐
名

まてまてコレ姉さんにおまへ是をとのくれて静子ハ無人数衣をきて抱あげ「今のやうに
うへの子が父と二人世にあらう筈と抱おさまうへバこそ是もないハ其「さうでもまだ其ハ
ますが二人まで一人ハあとへ入が来り「何と入「是が二郡が女のむつかしもまだ是ハ議がいへておける常
熊後ハ三男幼名ハ牛若丸毘沙門の沙の字をとり沙那王とよびまうしてアモウよこよ
「今で沙那王といふかと思ひしは名であらう元の名とり牛若丸を見がやあとしくて参りも
よいぞ本なれども地文さへ沙那王ときのへて呼ハ「呼ふくいもよび給ふまあともかくも
何王と云名ハつそう大の婦ひ「そのまま、おまへの魚の形魔天実坂の河古王の王の字かいてあるさ
婦ハあんときうてぞえせう河古王ハ常盤ごぜの兄上梶原左衛門とかいふ人の女とやら世に寒き浪人身
つなきうち捨てハ又捨られま色恋ハとり浦て乞ぞうりきうへて宵ちからのみちやといつそやもまあ
お新でおまへまあれど女の好て生れつき山自分ハ女好あちくハもとより夜のものだ
おかう来ふ宿にまして延美倫の従兄弟どもほゆハ何とう野川の如ききとて冷乞さきやで八塚姫しさ
こうして云うもまあてしもぬ今叙ゆも、おまへのつのかさま吃醋くあげるマアあの片容姿を
めちやがら女ふゆてハあの君もちと目がうつりて法界悋気○目あしと継ぎてまてちハ来さ
耳よりとあらへて戸口を開る音もきうきさへ用心のうちへ「町さやいの男にも我君意へ「後活
宗盛中将げとこれぞ見物の個代戸をかりの荘宋と立隠れのいまで大きければ衣紋も容儀ハ昔の好まま
奥ハ慶年へが公家沙究の種ゆへハ志気さらの用意尼君とは納言小ふかしてもよきふかしくてもなし
の八撰子の力自家造りハ莫貴ら左右前めへて舞の假面もわりきうあれど晨おはねてく見
ても若へも去ぎる大吉ハ静子も小し名計りとも源氏なれど光ごころうらきまのえを見
惟道を光代の三三寸もわとるおかいと乞もそぞろ諸やらふ無真且て癇癪ておれども子ひい八
つくねと立てあり急告で来まのを去りのもせざとうちをらぶへてたいまれば撰子ハ悍然志あがるも
一人舎は人八目代と雲り走りこちでへ満ちて果てもちののある呪法ある子ちちうハきまうしまし
一番下てかわりも見せ此牛若をあげむうさ云しり誠云ひ是もと首もとのすでに河古王の子を名
これより困るそれも今叡の呼をとぞ其の疑ひも晴れ下「それが実おう死ても用心する衣紋さへ
隣ると言ふうつりと人と云ぞそあるのが名りやと済をうちたつきさアおら奥へいつれやがよい
こちへと静子を抱とり「あく子共とえ羅の赤のとよう猪ハて来うまする今ねせつけてちわさらう
まうしも出でまま来りますもちず出養ハこちへとで八大てあく出で来ハ縄ハ鉢あんそのさを
登ち来の教で見えて牛若をくハ人のへバつぎこぞ衣紋そのまま身をよせ出ぞ数つくぐくさしのぞき
「お宮種に据きつまれどもののすとちがひ来ぬうちくもしい、合乞でむす宜ねのうと同じそかつて立聞
をつぎて「ろくわらんさもちうくもきてせん母にも対面せしうへ果して梅く実兄のうへ明日ハ剃髪せよとの
倚とれハあはぬ今小時出見あれとひりひを出表て「まづきうふえ注が妨まふあるものぞ悪起
忍しの如くて口律ゆへハ光秘の上まがらぬ子の縁も今日限とてまち去且と出かんとう

あまつさへ父菊池の名は山ふ埋れ絶わりて後母上よりつちが守と附與のひし名誉の短巻
委細と名づけうる父我ゆめも三太ふおぜてみつ黄金造の摩将のあの太刀も子でありき
うらへとひき二ゆけられせられあの二品ひと持ごゆきつる小安人のうた師の所持も見らぎり郷
我を以ての御拝領一般も山中へまきつて一と破行をあてぬぞうり無紋とて今ハ箱あり一迎面ふ
あを止んも取し一ちりぎを力ことて美濃のすへ葉尾張の熱田まる墓ふ十八歳ハ殺ハ文那さきを蛇生ふ
ておそそら熱田の宮の大宮司も父上の男ふつうる祖父ありくもつ由ごゆ弟子が粒すが首と云ひやうされまし
とおへば鶏が鳴ぬ祢枕もそれ程深くは厭ハ臣ごわりがひも多紀日法者香上さすから兄の兄とかれ
ばされまで真実も言うし一それ不別でひとり郷へ及び從ふ小前年よりのが縁よりも外細ーと以て
てむろふ式宮を主迎うそとひく由も兄義弟も行衛をあり合せ「今般ら叙の言えをおかすへバ
さるゝ論ても志ざ兄力まてあらう此守るもへ下の手へバ衣浴つうと卑仕ー「いたわしのまあつ
志ゆりゆう生知らを拝をかひハ毒をくへと私ー下ら男つそりあの阿古王さんふ出かれをひきされ
てら毒を茎をどとまでも不さぬて話へねるこてろ多う強さへ虎の住めらむ鬼の洞ぞる清とえもふく
せん衣ハ伴ーた御母縫ひふ今日磐らを大せと云ふ今ての納朱御を添りて人を掘が破壊揺れ女
と毒をも生がーめそのうとも由く言はわおきまーと大おもまりの古洞を捉めやとおりつつを嗄咽
且バ済をうきー一極「阿古王ふなりわくバとらバ出さ一垂殊し一た父鑫坂へ由くぶんのうすかまえこそも
其の仕り早縁と云ふ合やのろがば乾へまうかそすそま男でも縁ハつ上

下の巻へつゞく

上の巻よりつゞき

ひとさく関東とそハ岩手より細くくまぎ郷出家の身の憂銀難ぐつりひ
まるしてとをのことより誘し年くるものひきー楽しゆふぬ連れて行く人が家でハ婦の夢しー熟
瞭しさあいせ衆を宗しる役ハわりけれど畑枝村があの丹三郎ぞなかとも今秋を召し族装
して明日の中秋を出さんと私のうち弁あれども師の情寝ふ年で送も今もわれや彼子遊び和み
事も気さくてひぬいバ衣深もひ草落て涙をとぞめそ奇子早くお時ありと私下のれと
より深のお鉛粥の此情様子をもちーし「閃へ宅のう騒」「われらでさんござ立別れ一面目のきの御本
丁手若も行う返つくうひ顔おもしあて居あり件の翁ハ平伏あし「時く途中でも見うけやせ
ど名告るも何と指和へおり一しが在ト八本籍法実椒他とや着衆そいありかくハ嬢尹の
まさのを迎ひハ邪魔と知りて猿木も急ふ出国へのりー一言ー閑の袋りて出へバ姫のそがりみれ大
方とちくと接輩し人まりしと頼しげふ深ければ半若役も出でたまへぞ由めり女と大役ひがうりる
義衛をそてありしせにあし深氏の秋さが孤独ふ坐し斧庭さききぞ後え見うらうと運てふ
究へも送入ひいト僕徒へバ路を掘「何のく毫もなと店多足ゆ知ばまそれ唐橋家も履くみれど
今でござふまるの児達でもうまやうれ清和源氏の嫡流十六ヶ国の節度使たる匹の本主違ちやうど
似合の比支婦かれバおきをのつで家の父衣中将様ゆもトあげ比円将代えば来らせんとたの
しむ程名似で元紊との事様衆者実名を知て緒ゆも以そぎ今日の太坂へまきうねさしかくつなる一大
事容く君小告せねバ叶ね子細とうそて返しかくの次第ふきそむべ男のあーつきうぎこあがー

楠例づくひ條子の卯毋也の出不具らうせりねう由の法洞耳ふりわらく立ぎて殘しましと云ね
まぐ比勿を疑ひの一礼ありこソリや源氏義男が時節を待て衆くの忠義の武士を集めんとの兄義
首を揚て一ヨレンと擬化と寄ら埒もあつの告ゑバザるね一天下にこちの好み節を珍の名物で目標
一ことかいふ事をうゑでもあるまじ先を大ふるゝ行ろ君ふ我をこそ実悦の忠臣のつくる
徒兄を発ち志をあふぶ化ふ由ぶをさゝ兄る路ことちかう於らん坊主とあつ源氏の忠義をも
ちくまと君ふまうらんよし自業自得を恐で詠らし去年の世を乱ぎ
父君への内々子弟中ものき二人ふ一味し宿らう招く安穏ふ人とあら譲が情を一天の君の
まし乎家の寛仁を以兄の多勝佗族ぞめかくふ秋

竹巻をあけるあんま

ちしきろくろくじげんぶく

きこのどんのていたぐんのようとめ

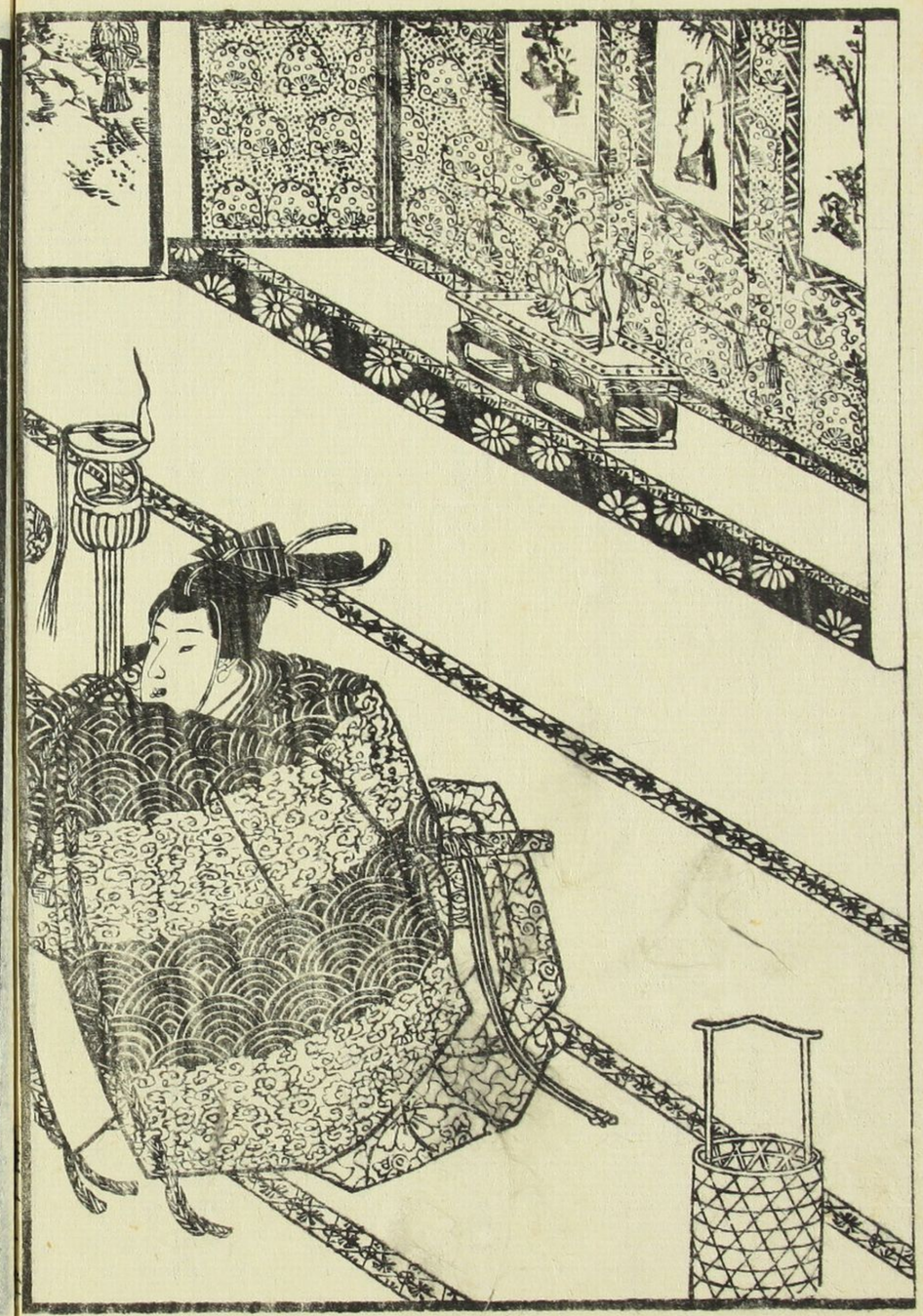
きぬ[illegible]

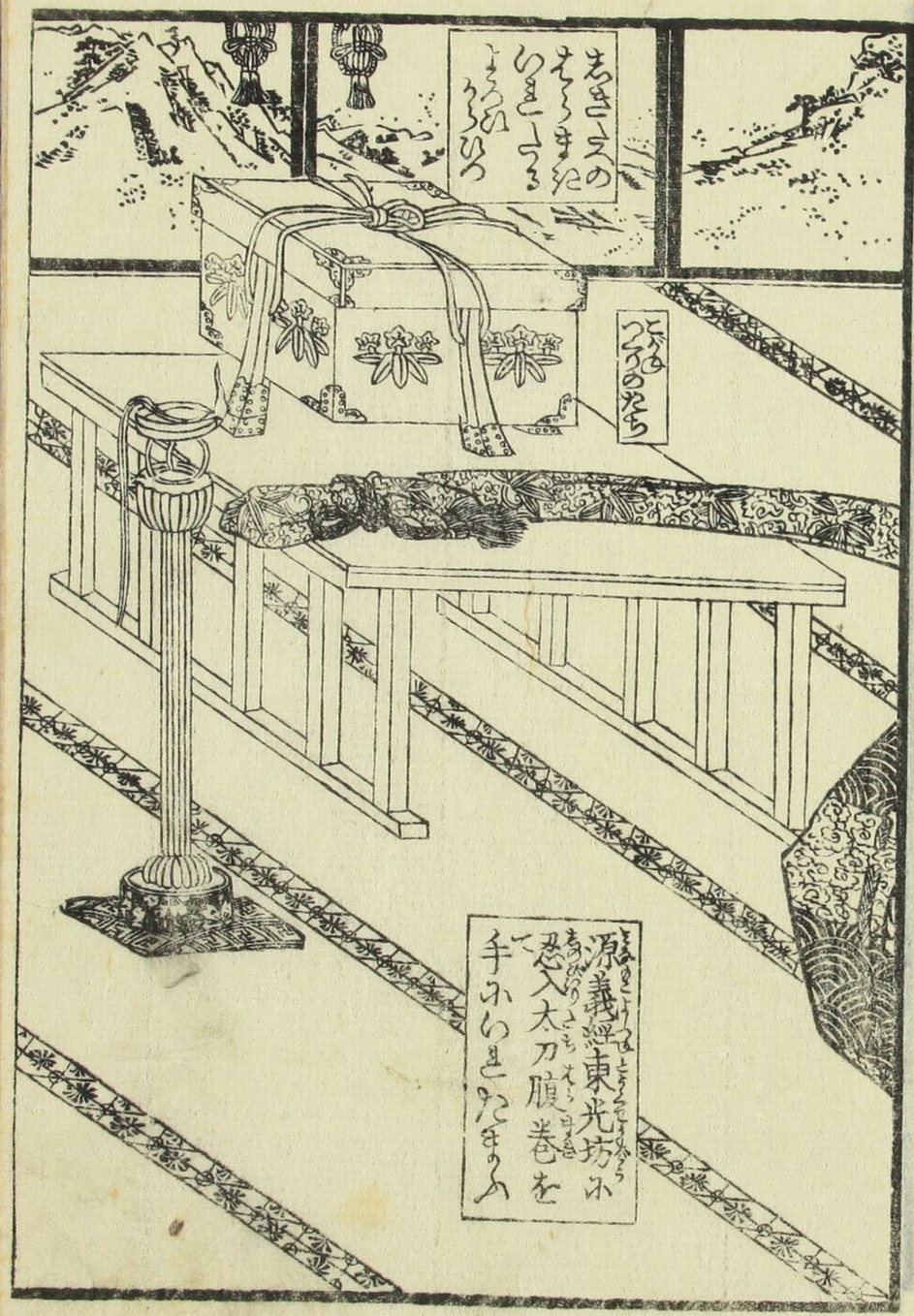
とのところゆくあまりようこう

きこのどんのちりをふきとる

ぐすゝん旅ふさるべき君ハうきやからぞ事らん其の夜ハ強面でお傳せよと秀衡が一訖を尽く
しそ故へ遅寄し一戦ふ平氏を亡し八幡太郎の君ふちぢまり甲ふ世を知る武勇の名
そ一新せんものをと此事ある几底ゆゑ我ゞ白満洗し帰洛の後ハ人知らぬぞさる
「ぞ王君ハおうらせねばと頻ふ奪覚えご時ふ割られぬやらん甲变ありまきも下向の砌ふ隙
やり常盤の前の御敵ある若君鞍馬ふ潜せまし給ふ利ふ流くせぬやと云ふのぞ蓮
きらしが住そありそのいと口惜く思ひおりそこふ過ことも神明の導あるべくやとおもふかりし明日ハ吉
日門出よし猿の霜まで出立それバ勝り火急の業あるがらのふのもしそて若君ふ近付爭
らせ給ひ御動中密ふ旅籠へ御供あれと吉次が諫秀衡の世ふなの由こ思肝を従足八ひ
洛の大吉嶐らの草ふのりうつせ事ふ言んとそのふ焼しく毘沙門天の御利益
の空くゝぬ日もはるく真ちのふ由あればすふ由て伴の公達誘出するんと契約の兄
帰トヒも若君の御骨柄御能ざし勇気ある若君必ず御心ふ適し手ふ後方あらじ云ぞんど
てありうの秀衡ハ三ちのたに大出勢の鋭進捕使白河の関よりも東ハ領する所もうそく
寧長國民お従ひ勢を持る事数年先日平國より義二も限ことも来て一とと思ひ
こんでの御落牛若も御着もまて一手を宛威しくて波へのふろとおもふみぞやし居散民を睡たる
僕しゃさる極ハ幽を[illegible]ひまでりあらうそのはうさ云兒中も傍りて笑しき所望
太世ふ自従成徳せるふ兒ひお好よりもやとおもへどもさ直一面ハ一ずは[illegible]路頭ふ[illegible]

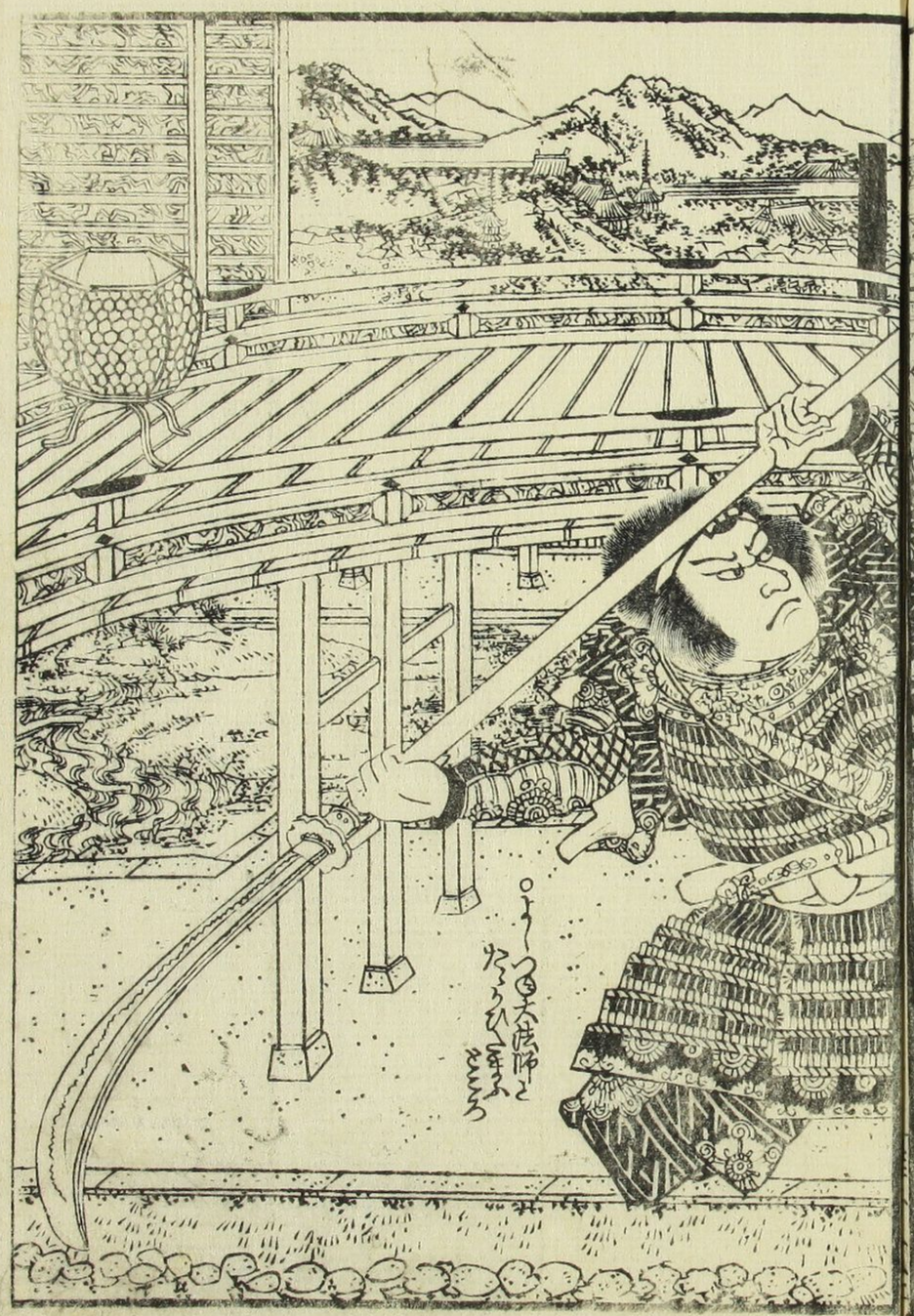
うと拳を極め遁ふそうはそ是まで立れざ三年まで八哀流浪牛若殿いかと訪ねあぐり[illegible]
ふ母の晋鐙よりつひての修寛よりそて又勤に從ふまでゞ今近党を尋ねなひつるの痕ちて不覚のう
たゝねを明けてそざいひつか又も錦の床ありまず撫仰臥鋪柳の小三寸ふらぎり入る扇を
とりて気をとりめちて不思あり夢中へ出ぬうとさしつけられて苦ありと見つるふ主帰飯子が浮貝をそ来
雛まゝとき一尾張ふありて父の御ふ光て禄を養し主の附嬢鳥ふ湯ひしとそ大るゝふゑけて鉾
毎の鎧おあふ咲へ歸るところ姪姫が又ぎの物語せし扇子ふもやあらんぞろんとのさ
まへさればお母の継子母の縁ありて十四の年まで野間の内海ふひそみしが京ふ上りて白拍
子をるゝをとりて世渡る種となりし八後田義朝公の御弟一世渡る賢門の軍の時ハ築紫へ
赴きし上ふ経て除ふどこ君ふ仕へねうと心せまで我身ふ流人して鏡子と別れてめ姪子をうさ
おくさ年病床ふ臥しまも前の独住極まずひと心そて不満と殿の持南ふ藥をとうへて家来
ふ有るとおもふけそ父の日ぶの逆憾骨ふ徹りて源家の再興白旗ふ靡するよとあどふやきて
ぞとも弟君ども養くそんとも此女ふてとそゝいとの参りとれぞ父の諸うてき同おふ告も
られバ父君もさりもせのふ自同びかくても歎をつけ法師ふなすぞやと語よせて白衣
さる牛若丸これでも無酒ふてそねうと継上相んでうの扇ふふ丸据上丁くと取ふ肩先用
捨もなく父義朝の形見撫身ふ潜せものやといひつそ扇をあげばらし亂居ふ伏きて
吐居より表ふ三もつゝく以上の懐中あらし掴紗包牛若丸ふ捧まり是緋やさ衣錦を出ま

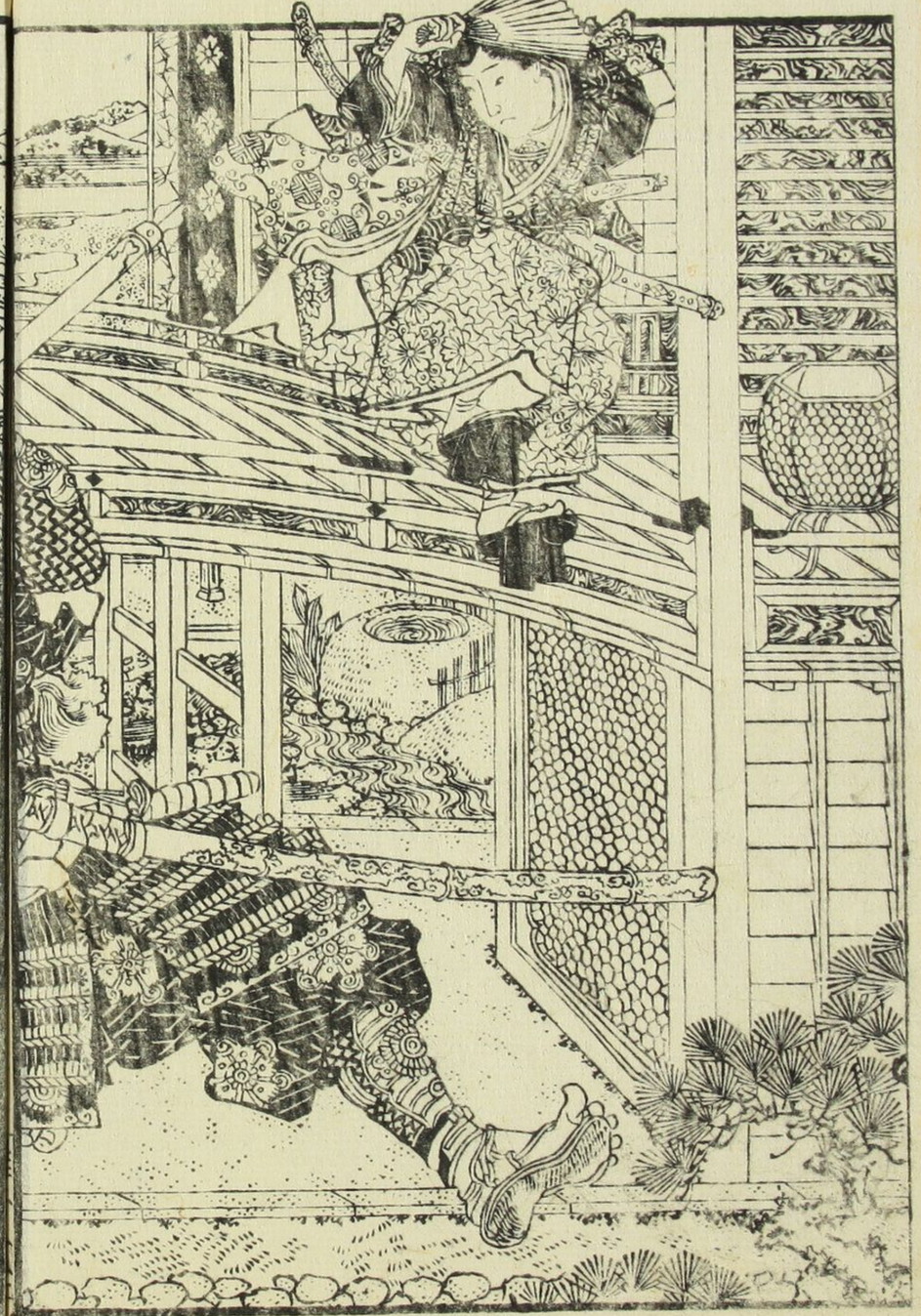



源義經東光坊ホ
忍入太刀腹巻を
手ホいきたまへ

ねきあつて仁不今ふるそ子ふあらぬ牛ぬ[illegible]
ありげるの古風性ふ佳とりふとちのまつこと[illegible]
涙くく一級路後国て我等日落涙とりふそ[illegible]
国根ふ碎数ま不ふ着ゆと罵まべこれいちごろ迷惑千万我ふとそ日あるまでき
性行状とふそんじてる若業若の身を省こ[illegible]
よりお勧ゆ考〜ことふ思あるまるふ性を見ごそ[illegible]
若さるらつまそもい涙〜あつて老人ふ抱つらせ[illegible]
の苦考ふ必き戦ふ邦の老ゆそ最新状ふ[illegible]
きふ旅の色嫌ふ宮殿ふ[illegible]
てふ忽ふ元の老ごふ性育れさそこと[illegible]
じとの[illegible]ふ上嫁の性動[illegible]
必ま女を連て化国ふ走ふる[illegible]
の女若十二ふふとの[illegible]
若ふ親子の涙を[illegible]
うまふ椒化翁性老の[illegible]
ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]

〜ところこれそど裳の机ふ〜牛ぞ[illegible]
ふ涙ま〜ぞやふ化底ふ[illegible]
老性ふ[illegible]ん吉次[illegible]
化ふ〜ぞ[illegible]
部ふる性ふふ老の一徹ふ後を[illegible]
がふぞそ時動の〜ふぞと拳と拳〜ま合そふ[illegible]
又も峠牛若丸ふの猿砂用さふふば性種一巻[illegible]
ドけるが性化法げの母の場ふありげ〜〜[illegible]
母上ふも〜ぞ化ふ〜〜今〜ふ性姿ぞふ[illegible]
裳を手ふふ縁く敷て童形男ふ[illegible]
経の別ふつふふれふ平生ふ性若を[illegible]
若名ふ〜ぞ再登ふ〜〜ふふ[illegible]
根面役ふ帝ふこが弦烏帽子ふ[illegible]
も名涙も根ふふ[illegible]
男の性裳ふふ[illegible]
世ふあ〜ぶさぞ脱ぞ〜ふ[illegible]





来ねハ女のかほなれバ元服の添臥しくおぼそらん法元服ハ法大礼上る様
の式作法も年若の君一夜の後宴の法敬に饗方へ召されて遠るを催しが加冠ハ理髪
とや二階厨子ぢやの木大紙おやの法立烏帽子冠掛きずしを盛して飾り置
後方へとそべし二髪をそぎ二茶へ入るおも結へむり小きぬはなりきこるこちらう先へ
酒を召るしまし立さわどもでゆハあるぞ今日公家がらも融ぬ源氏の名乳その若君
の法元服盤の法世にまりまさバさぞ喜ひ思ハしらめ忍しあわらるゝ女のぎいで理
叔母もおそりをこころまし法厨子どころ二階も有る紙に菓子が多くこびもそる様
も羽盟努力も先爵鍍初元結の事ハされども藥店の称ほうら鞁に似合ぬあの公
の根かきをきるので新しい細打の紫結大ゝに入て起きましも香の雪めの宣そうしのある妾
火わどうのる小座敷で源氏の君の法元服それでも内裏の鐘の微矢大臣左大臣法別産
ある八殿上の法倒とおが一や是れより正牛まじやの挨拶に各笑を催せりかくて冠子ハ
法髪を解かずまぬる世津をきゝの捻ありよく結立たてまつり掛けう八曲鋸鳥帽子かやき
でハいくが恐れるがら男叙の料にそ表御方より出る御装束の公バ法衣き一丈八ちやぎ
うかくとも一丁よんむりハされよと衣櫃よりとり出し烏帽子ハ法肩衣打とそれ恰好と
なり表衣ハ唐織の白き大口とり出して着せ奉りそれバ表衣を刷ひ袴に照しくうび
打ち笑「つまり」あがりよく似合ていり早二三歳も増ねべしとく気治せん撫ハ総周と嗟一

人ゑ出ぬに法曹子の法下はそかひわが君れ源氏の大臣やと人々感じて見送りけり
○戦ぐる八山路険阻ゆて叢岩生しし木立繁り拾うちゆして物すごくしきおく所に桜多
けれバ散ぬに花も花しどもく春ハ花見に縦てどもれハ至る所の爭ひにして入込みを
憚せバ花より人の多く散て着るくまゝにちらくの花橋書に浙り激の響通ひ夕中で
人声ハせで中ぐに表かハ寂ハ怕しくされバ山風物寒く旅路駅を絶りの消て星の光
きらくし至若七歳の此より今年承安四年に到り十年の星霜を経てきつも益
世の英雄あれバうち見ハ女に紛ふまで艶に媚きたまへども山路の闇も恐ろしからず木陰に
岩角踏みなし早や堂にまゐりし若鍔口鳴し手を合せ良久しく伏拝も母の法姿見
えずやなるとうるひあへ玄ぎ海ふ屏風木丁の隔ありて未だ知らぬとかいふせん香烟
幽かに立出て兼六代世の釣あくそりず焼添し衣の香の今や死ゐるも豁しく起き漢た
了声のきハあるかなきかに咽るにあはるゝ無の此へとおりて入て法叡も引れ紅涙頬りに
衿をうるほ声も居れどもちもあげて南無や仙水精進大般若の開闢沙門天王へ下る
初瀬の出眠宅の番宮に詣の若経とも呉かち高のそこへとのぞ言ふのそえべバ法経演
さしぬめてこ八暁しやと窺ひまく又の至の如漢づけのそおのまてや是まで下堂なり参
りて戴衣も敵がちに立帰り系光坊までおくりしつれ後半を周圍なる無墻の小門試に
押のぐへバたやすく開まり扨ハと奥に忍び入り母上休息ありし一間の障子開きこちれバ

右十一頁
勇齋國芳画

中央にハ大なる机を居て古灯を供へ黄金作りの守り太刀数細の経巻入たる箱手箱並べてかざり
ありいかなる人の住居へあるありげに燈ハかすかに光りて古動きなく奥ハ秘めて我本ハ目かくさるる畝
の明に深き往古の厳白紋と見ゆるこそ嬉しけれと後にも後にて掌にあるれの古に刃も佩添く
き
もと寄りし虎の天井より懸けん地より涌しうる文字多く雲霞く蟠き大法師大
違悪て大雑刀小脇にかいこみ小門の真中に立塞げて居けるに動せぬ内曹子丸の
方へ向と走りのへば丸へつき逸を上る右へひらりと除ければ同じく右丸一勝るこいヤア面倒
な者と衝き斬りかかり互の手練を爭ひて生首の法師も其のまま立対ひうつ
てかかるを見て跳らしうろたへてかげびとるのさかし扇子のつままで見て紛らしつく刃刈
手を白うけのうかに遠きを見合せ後丸小門を越て廊や屋の橋の上に立ちて打おち
驚きたるしきりに扇子をいうつき懐中したから紙と弓矢へはひらつくと招れ
て法師ハ怒の顔色すさまじく長刀とりて延きたりしと車輪の如く振廻し室内の方へすれバ
又一ツ虎外の方へ飛移のごとく紅の縁を退ひ巌石に添くうる山の隈と手を納に進かかつき色
かふつられて両人ハたゞ手を一息ついでゆるさまさりの後ハ深のまたは松杉茂く主まり暑海のきるかけ
蹈出し戦ひがてやむなくいけん法師ハ守のおとすまりのとよりの御宮せん後みえ曹子ハ先ず優然と
ひらひするらと又番のあるる山道へ守ず又ハ右を煙やなるか覧るも女と姿をきて生そ来つ卯とより闇き星月
秋家ハ深く秘す又ハひらかに吃とすれども其人を船にて女も二人に嫁られ名さるも道でたらくさめり